

## 論 文

## シスモンディ研究序説

——シスモンディの生涯と彼の遺産(完)——

小 池 渺

- I. はじめに
- II. 18世紀末～19世紀前半のヨーロッパに生きたシスモンディ
- III. シスモンディ自身によっては公にされなかった彼の作品  
(以上、本誌第42巻第6号)
- IV. シスモンディ自身が公にした主要な作品
  - (i) 歴史関係の作品
  - (ii) 経済関係の作品(以上、本誌第43巻第3号)
  - (iii) 文学関係の作品
  - (iv) 宗教関係の作品
  - (v) 法律関係の作品(以上、本誌第43巻第5号)
  - (vi) 政治関係の作品
  - (vii) 時論的な小品
  - (viii) 小括
- V. シスモンディが受けとって後世に伝えた文書類
- VI. 結び (以上、本号)

## (vi) 政治関係の作品

とりわけ法律学者としてのシスモンディとは相即不離の関係にあった政治学者としての彼は、書物の形式においてはわずかに1点の作品を遺しただけであった。それは、1836年刊の『自由な諸人民の政体にかんする<sup>エチヌードウ</sup>研究』<sup>1)</sup>であった。

1) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Études sur les constitutions des peuples libres*, tome premier de ses *Études sur les sciences sociales*, Paris: Treuttel et Würtz, 1836; Bruxelles: H. Dumont, et Londres: Dulau et C<sup>e</sup>., 1836. なお、以下においては後者のブリュッセル=ロンドン版を利用することにする。

この作品は、標題こそ1796年起筆の 前掲 のシスモンディ自身の 未完成原稿を、あるいはその原稿をもとにして公刊しようと彼が1802年ごろまで意欲を燃やし続けた「著作」を、彷彿させる<sup>2)</sup>けれども、プランや構成の点においてはそれらの「著作」や原稿とはおよそかけ隔たったものである。当面の作品は、もとをただせば前に言及した「シスモンディ全集」の中の「社会科学研究」の「第2巻」をなすものとして1835年に構想された<sup>3)</sup>。それが翌36年には、前掲の独立した 論文集『社会科学研究』の第1巻として刊行されることになったのである。その『自由な諸人民の政体にかんする 研究』は、<sup>エチュードワ</sup>「まえがき」と「序文」と8編の論文と「概要一覧表」とによって構成されている。巻頭の「まえがき」によれば、「この巻に収録されている8編の論文のうち、2編はほとんどそのままの形で……〔1833年創刊の〕『〔月刊〕 経済学雑誌 (la Revue mensuelle) d'économie politique』に発表されたものであり、他の2編は事後に大幅な修正を蒙ったものである。残りはすべて、これまでに一度も公にされたことのなかったものばかりである」<sup>4)</sup>ということである。

しかし同時に、いま引用した一節の前後の個所によるならば、当該論文集は、思想的内容の面においてはそれより40年前に書き始められた先の原稿とその軌を一にしているということでもある。62歳のシスモンディはつぎのように

2) 本稿(上)の218-19ページに紹介した1798年起筆の10篇構成の原稿は、シスモンディ自身によっても 'Recherches [または recherches] sur les constitutions des peuples libres' として言及されることが少なくないのであるが、いままさに本文中に紹介しようとしている書物の「まえがき」によれば、その原稿は 'Études sur les constitutions des peuples libres' という標題の「著作」のためのものであったようである (Cf. *ibid.*, p. ii)。

3) シスモンディの「全集」プランにおける「社会科学研究」「第2巻」の構成については、つぎの文献を参照されたい。Sismondi, Note de mes œuvres complètes, ajoutée à sa lettre à Treuttel et Würtz, Chêne 16 mai 1835, et reproduite par Jean-R. de Salis dans son *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits, suivis d'une liste des sources et d'une bibliographie*, Paris, 1932, pp. 67-8.

4) Sismondi, *Études sur les constitutions...*, p. iii.

述べている。すなわち、「私の若い頃の作品〔1796年起筆の原稿〕……に目を通してみると、私の信条はほとんど変わっていないことがわかる。……この巻……〔の〕8編の論文……が提示する政治学説の総体は……40年にわたって多くの革命の衝撃に耐えぬいてきたものなのである」<sup>5)</sup>、と。

したがって少なくとも晩年のシスモンディ自身の考えでは、この政治論文集は、1796年起筆の例の原稿と同工異曲の作品であったということになる。それらの作品のうち後者の原稿は、すでに述べたように、彼の存命中にはついに公にされなかった。彼とともに「多くの革命」を生きぬいた同時代のヨーロッパの人々にとっては前者の論文集こそが、シスモンディの「強靱な」政治思想を伝えてくれる唯一のまとまった作品であったわけなのである。

それだけにこの論文集は、彼らの多くによって興味深く読まれたのであろう。早くも発刊の翌年にはそのドイツ語による翻訳版<sup>6)</sup>が刊行されることになった。原典はその前後の頃にトスカーナの検閲官によって発禁に処せられた<sup>7)</sup>のであるが、そうしたことなどものともしないかのごとくに、1839年にはその増し刷り<sup>8)</sup>とイタリア語による翻訳版<sup>9)</sup>とスウェーデン語翻訳版<sup>10)</sup>とがあいついで発行されもした。ちなみに、当の政治論文集はシスモンディの晩年

5) *Ibid.*, pp. ii-iii.

6) J. C. L. Simonde von Sismondi [*sic*], *Forschungen über die Verfassungen der freien Völker*, uebersetzt und mit Anmerkungen begleitet von August Schäfer [*sic*], Frankfurt a. M.: Verlag von Wilhelm Küchler, 1837.

7) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre d'un cosmopolite philosophe*, Paris, 1932, pp. 441-42.

8) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Études sur les constitutions des peuples libres*, Bruxelles: Société Typographique Belge, Ad. Walhen et C<sup>e</sup>. [*sic*], et Londres: Dulau et Comp<sup>e</sup>., 1839.

9) G. C. L. Simondo de'Sismondi [*sic*], *Studi intorno alle costituzioni dei popoli liberi*, Capolago, Cantone Ticino: Tipografia e Libreria Elvetica, 1839.

10) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Studier öfver de fria folkens statsförfattning* [*sic*], Örebro: N. M. Lindhs Boktryckeri, 1839.

の作であるということを考慮して同書の普及の状況を彼の死の少しあとまで辿っておくならば、1843年にはフランス語による原典の事実上の新版<sup>11)</sup>とスペイン語による初訳版<sup>12)</sup>とが、そして1847年には原典「第7論文」のみの英語による翻訳版<sup>13)</sup>が、また1848年には先のドイツ語翻訳版の「新版」<sup>14)</sup>とイタリア語による新訳版<sup>15)</sup>とが、さらに1862年にはもう1つ別のイタリア語新訳版<sup>16)</sup>が、それぞれ公にされているようである。

1796年からの「40年にわたって多くの革命の衝撃に耐えぬい」たのちにこうしてヨーロッパ中のいよいよ広範な読者に伝えられることになったシスモンディの「政治学説の総体」は、それでは一体どのような内容を有するものであっ

- 
- 11) J.-C.-L. Simonde de Sismondi, *Études sur les constitutions des peuples libres*, Bruxelles: Wouters, Raspoet et C<sup>e</sup>, 1843.
  - 12) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits...*, p. 66. この文献に '*Estudios sobre las constituciones de los pueblos libres*, trad. par D. Leon José Serrano et D. Felipe Picon García, Madrid: imp. de la Amistad, lib. de A. Gonzalez, 1843; in-4°' と記載されている当該スペイン語翻訳版については、筆者未見である。だが、その出版年がつぎの文献に「1834年」と記されているのは、単純なミスによるものであろう。吉田静一『フランス古典経済学研究——シモンド・ド・シスモンディの経済学』有斐閣、1982年、281ページ。
  - 13) De Sismondi, On Constitutional Monarchy, in *Political Economy, and the Philosophy of Government: A Series of Essays Selected from the Works of M. de Sismondi*, London: John Chapman, 1847, pp. 417-47. この英語による抄訳を本稿(中)の62ページの注84においては『経済学研究』からのものとしてとり扱ったが、それは誤りであった。
  - 14) J. C. L. Simonde von Sismondi [sic], *Forschungen über die Verfassungen der freien Völker*, neue Ausgabe, Frankfurt am Main: Verlag von Johann Valentin Meidinger, 1848.
  - 15) Sismondo de'Sismondi [sic], *Studi sulle costituzioni dei popoli liberi in Europa*, pubblicati per cura di Francesco Dias, Napoli: Stamperia di Salvatore de Margo, 1848.
  - 16) Cf. Carlo Cordié, Un importante inedito del Sismondi: il ginevrino di Pescia, *Il Resto del Carlino*, giovedì 12 maggio 1966. この文献において「1862年にPalermoのTipografia di Michele Amentaから刊行された」といわれている当該イタリア語新訳版の現物は、筆者未見である。

たのであろうか。本稿においては、彼の政治思想の内容に詳しく立ち入る余裕はない。ただ、今後の研究の糸口となるかもしれないことを簡単に述べておくならば、サリスは、『『自由な諸人民の政体にかんする<sup>エチヌードウ</sup>研究』は1814年と1815年にシスモンディが論文やパンフレットの中で提示していた自由主義的・反民主主義的な学説を、要約したり敷衍したりしたものである』<sup>17)</sup>と解説している。当該政治論文集については確かにシスモンディ自身も、彼の『社会科学研究』の第2巻の「まえがき」の中で、「第1巻すなわち自由な諸人民の政体にかんする<sup>エチヌードウ</sup>研究の目的は、こんにち理論家たちの間で主流となっている民主主義や実際的な人々の間で支配的となっている反啓蒙主義との対比において、真の自由主義と思われるものを提示することにあつた」<sup>18)</sup>と総括してはいる。けれども問題は、シスモンディのいう「真の自由主義」とは何か、また彼は「民主主義」をどのようなものとして理解していたのか、ということであろう。

いま紹介したサリスの解説によれば、シスモンディの政治「学説」は「反民主主義的」であるということであったが、それではシスモンディは、主権在民という民主主義の基本原則を否認していたのであろうか。断じて否である。上に引用した一文のすぐあとのところで彼ははっきりと述べている。「理論家たち……とともに私は、主権を享受する権利は国民自身にしかないということを認める」<sup>18)</sup>、と。しかし同時に、彼はつぎのように続けてもいる。すなわち、「といっても私が希求するのは知性の支配であり……確固不動の、しかも良識のある意思の支配なのであ」って「肉体的な力や数の支配ではない」<sup>18)</sup>、と。つまり彼は、「理論家たちの間で主流となっている民主主義や実際的な人々の間で支配的となっている反啓蒙主義」の中に多数決の原理や衆愚政治への傾向をみてとって、それらのものを退けながら、人間の主体的な秩序形成能力としての「知性」に、ないしは相互に結合しようとする「国民」の「確固不動の、し

17) Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 425.

18) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Études sur l'économie politique*, t. I, tome second de ses *Études sur les sciences sociales*, Paris: Treuttel et Würtz, 1837, p. vi.

かも良識のある意思」に基づく国家統治こそ「真の自由主義」を特徴づけるものなのではなかろうかと主張しているのであろう。

多数決の原理にかんしては、1815年に刊行された前掲のパンフレット『フランスの憲法典の吟味』においてもシスモンディは、きっぱりとこれを否認していた。「投票の半数プラス1が投票の半数マイナス1を支配するという絶対民主制の契約と目されるもの以上に人間相互の本源的な<sup>フッソアソソ</sup>結合に反するものは、なにひとつ考えだすことができない」<sup>19)</sup>、と。少なくとも当時のシスモンディは、「平等の關係にあってしかも幸せに暮らしたいと思っている我々が結合しあうのは、もっとも強い者がもっとも弱い者を抑圧するなどといった事態には陥らないということを相互に確認しあうためなのであり、また……理がある場合にはたったの1人でも万人に抵抗しうるようにするためなのである」<sup>20)</sup>という考えに立脚していた。そしてその立場から彼は、多数決原理が導入されれば「少数派はもはや自由ではなくなってしまい、もはや多数派から身をまもることができなくなってしまう」<sup>21)</sup>といてこの原理を退けたのである。

当のシスモンディにしてみれば、わけても代表民主制の場合には「公民」から託された「無制限の権限」を彼らの「代理人が濫用することになるであろう」<sup>21)</sup>と予想されるだけになおさらそれに反対しなければならなかった。その際に彼は、代表民主制に固有の陥穽をつぎのように指摘するのを忘れなかった。すなわち、「議会の外においては代表される者が彼らの代表者によって抑圧され、議会の中においてももっとも弱い党派がもっとも強い党派によって抑圧されるということになって、その対立は国家的な犯罪とみなされるようになるであろう」<sup>21)</sup>、と。

このような代表民主制にせよ先の多数決原理にせよ、その陥穽は詮ずると

19) *Idem, Examen de la Constitution française [sic]*, Paris: Treuttel et Würtz, 1815, pp. 93-4.

20) *Ibid.*, p. 93.

21) *Ibid.*, p. 95.

ころ衆愚政治につながっている。「議会の中」において「抑圧される」ことになる「もっとも弱い党派」であれ「代理人」に「無制限の権限」を譲渡することになる「公民」であれ、さらには「もはや自由ではなくなってしまう」少数派」であれ、彼らはみな同じように政治への参加のむなしさを覚えるであろう。そのむなしさは、彼らを政治への不信や不参加や無関心に、あるいは体制への順応や追従や翼賛に導かずにはおかないであろう。また彼らを「抑圧」する「多数派」や「公民」の「代理人」や「議会の中」の「もっとも強い党派」のほうも、権力のうえにあぐらをかいてみずからを直接に利することばかりを決定するようになるであろう。長期的にみればいかに国家、社会にとって必要なことであってもただそれだけの理由では彼らをつき動かすことはできないであろう。こうして衆愚政治が現実のものとなるのである。とくに、シスモンディの政治論文集を解説しながらサリスが言及したところの「無知であるばかりかしばしば反動的でもある大衆」<sup>22)</sup>が投票の過半数を制する場合、あるいはそのような「大衆」が「実際的な人々」によって利用され動員される場合には、ただちに衆愚政治への転落がみられることになるであろう。シスモンディは恐らくこう考えていたに違いない。

いずれにせよ彼は、1815年刊の例のパンフレットの中で、人々の財産の有無をも考慮に入れながら「民主主義」にかんして総括的につぎのような所見を述べていた。すなわち、「民主主義においては、しかるべき理由があつてのことなのであるが、ひとはとりわけ、何らかのものをもつ人々にたいする何物をももたない人々の支配力をひどく恐れている。だがしかし、貧者を絶対的に富者の意のままにさせるというようなこともまた、あつてはならないことなのである」<sup>23)</sup>、と。ここでは彼は、ひとの恐れる「ジャコビニズム」<sup>24)</sup>にばかりでなく

---

22) Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 425.

23) Sismondi, *ibid.*, p. 95.

24) シスモンディの「ジャコビニズム」論についてはつぎの個所をも参照。 *Ibid.*, pp. 49-50.

「富者」による「絶対的」な支配にゆきつく可能性も「民主主義」には大いにあるのだと指摘しているのであろう。

以上のようにシスモンディは、民主主義のある特定の原理とそれに由来する幾つかの存在様式に異を唱えた。しかし、だからといってただちに彼のことを、サリスにならって反民主主義者とよぶわけにはゆかない。シスモンディが反民主主義者であったかどうか、また、かりに反民主主義者であったとすればいかなる意味においてそうであったのかといったことは、当時の「理論家たちの間で主流」となっていた「民主主義」や「実際的な人々の間で支配的」となっていた「反啓蒙主義」にたいする彼の反対論ばかりでなく、主権在民の原理を採納した彼自身の「真の自由主義」論をも吟味したうえで論定すべきであろう。

しかるにそのシスモンディの「真の自由主義」論については、筆者はまだこれを十分に把握しているとはいいがたい。すでにみたように、彼のいう「真の自由主義」とは、基本的には、「人間相互の結合アソシエーションの本源的な契約」<sup>25)</sup>をとり結ぶ1人1人の「国民」が、「自由」を堅持しながらみずからの「主権」を行使して「知性の支配」を、あるいは「確固不動の、しかも良識のある意思の支配」を実現させようとする運動のことであるらしい。その運動は、直接には「富者と貧者とを、そして旧い公民と新しい公民とを……また教養のある人と無知の人とを、さらには文民と軍人とを一致協力させること」<sup>26)</sup>から始まると考えられているようである。だがしかし、それらの人々をいったい誰が、何によって、どのようにして「一致協力させる」のであろうか。この肝心かなめの問題をめぐって、シスモンディはどのようなことを述べていたのであろうか。あるいはそれについてはなにひとつ述べていなかったののであろうか。残念ながらいまの筆者には、明確には答えられない。本稿においては彼の政治思想の内容に詳しく立ち入る余裕はないと前述したゆえんである。

25) *Ibid.*, p. 93.

26) *Ibid.*, p. 94.



### （vii）時論的な小品

最後に、政治、経済、歴史、等々にかんするシスモンディの作品の中には、彼の時論家としての側面をひととき強く感じさせる論文やパンフレットなどが含まれている<sup>27)</sup>。それらの時論的小品は、主にどのようなところに発生したできごとをとり扱ったものかという観点から、以下の3つのグループに大別することができるかもしれない。

その第1は、ヨーロッパのある特定の地域の内部に生じた社会現象をとり扱ったものである。なかでもヨーロッパの小国に出来た事件をとりあげた作品として、たとえば1841年発行のごく短いパンフレット『3月3日の会へ』<sup>28)</sup>などがある。そのパンフレットは、同年11月のジュネーヴでの暴動を「民主主義的」反対派の矛盾にみちた軽挙妄動として非難したものであった。それは、少なくとも当時のジュネーヴにおいては多くの人々によって読まれたか、もしくは読まれるべきであると思われたらしく、同じ1841年のうちに2度も版が重ねられた<sup>29)</sup>。

また、ヨーロッパの大国の中の周辺部に現われた事態を組上にのせた作品としては、1836年に発表された論文「1834年のアイルランド」<sup>30)</sup>がある。これは、イギリス (H.-D. Inglis) の著書『アイルランド旅行記』の第2版が刊行され

27) シスモンディの時論的小品のうちの幾つかは、原語のまま、あるいはイタリア語に移しかえられたうえで、つぎの文献に再録されている。G. C. L. Sismondi, *Opuscoli politici*, a cura di Umberto Marcelli, X dell'Università degli Studi di Bologna, Facoltà di Lettere e Filosofia, *Studi e ricerche*, Bologna: Cesare Zuffi, 1954.

28) J.-C.-L. de Sismondi, *A l'Association du 3 Mars*, Genève: Imprimerie de Ferdinand Ramboz, 1841, 15p.

29) それら2種類の別版本のうちの1つは、標題紙に 'seconde édition' という文字が刻み込まれている。

30) *Idem*, L'Irlande en 1834, *Bibliothèque universelle*, mai et juin 1836, et tirage à part, Genève, 1836, 67p. この論文の前半部分は、前注27に掲げた文献に原語のまま再録されることになった。なお、アイルランドは1801年からの100年余りの間、「大ブリテン及びアイルランド連合王国」の一地方であった。

たのを機縁に、1834年の時点における当該地方の困窮した事態をあくまでも内在的にとらえようとしたものである。その論文によれば、アイルランドの困窮の原因をめぐっては当時すでに大陸ヨーロッパの反イングランド的な愛国者とイングランド人との間で、また狂信的なプロテスタントとカトリック教徒との間においても熱っぽい論争が展開されていたようであるから、問題の原因を17世紀中葉のアイルランド人自身の間での所有権の変革に求めたシスモンディの当面の論文は、新しい観点を提供するものとして少なからず話題になったに相違ない。

さらに、ヨーロッパの大国の中の中心部に生じた事柄を論評した作品としては、たとえば1815年のパリ滞在中のシスモンディが同地の定期刊行物の4月発行の諸号にペンネームを使って投稿したとされている連続論文「最近の世論にかんする考察」<sup>31)</sup>などがある。その連続論文は、かりにサリスによって紹介されたとおりのものであるとしたなら、世間の耳目を大いに聳動したに違いない。というのもサリスによれば、それまでのシスモンディはスタール夫人の率いるコッペ・グループの一員としてナポレオンにたいする嫌悪感ないしは不信感をあえて隠そうとはしなかったのに、この論文においては一転して復位直後のナポレオンを、「まさに人民主権の名において彼はみずから皇帝となるのだ」としてあからさまに擁護している<sup>32)</sup>ということであるからである。

シスモンディの時論的小品の中には、第2に、ヨーロッパの複数の地域の間に発生したできごとをとり扱ったものが含まれている。わけてもヨーロッパの大国同志の間に生じた問題をとりあげたものとして、たとえば1814年に発行さ

31) *Réflexions sur quelques opinions du jour*, (signées Charles d'Oléastre,) *Le Nain jaune*, Paris, 5, 10, 20 et 30 avril 1815, citées par Salis, *ibid.*, surtout p. 282 n. 2, et *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits...*, p. 62. この連続論文については筆者未見である。

32) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, pp. 266-88. なお、本文中における引用はこの文献の284ページからの孫引きである。

れたパンフレット『黒人奴隷の売買にかんするフランスの利益について』<sup>33)</sup>などがある。そのパンフレットによれば、ナポレオン戦争直後の同年5月の対仏講和条約(第1次パリ条約)の締結にあたってフランス側は、黒人奴隷の売買をさらに5年間続けさせて欲しいと執権に要求した。これにたいしてすでに7年前に奴隷貿易を廃止していたイギリスは、賠償の請求権を放棄してでも断固として拒否すると言明した。そのために問題の解決は同年9月からのウィーン会議に持ち越されることになったのであるが、来たるべきその会議においても従来と同じ要求を繰り返すのは、フランス人にとってはいかなる観点からみても好ましいことではない。彼らフランス人の利益は熱帯地方の諸国との間で製品の売買を、しかも自由な貿易を行うことにこそあるのだ、ということである。大略このように論ずる当面のパンフレットは、つとにヨーロッパ的な規模において奴隷貿易論争が繰り広げられていたこともあって、刊行と同時に広範な読者を獲得したようである。それは、同じ1814年のうちに3度も版を改められ<sup>34)</sup>、その間にはまた、副産物として奴隷貿易問題にかんするシスモンディ自身の新たなパンフレット<sup>35)</sup>を生みだすことにもなった。

また、ヨーロッパの大国と小国との間に生起した事件を論評した作品としては、たとえば1832年に発行された短いパンフレット『イタリアの希望と必要について』<sup>36)</sup>などがある。そのパンフレットは、7月革命の2年後のフランスに

33) J. C. L. Simonde de Sismondi, *De l'intérêt de la France a l'égard de la traite des nègres* [sic], Genève: J. J. Paschoud, 1814, 59p.

34) *Ibid.*, Londres: Schulze et Dean, 1814, 52p.; seconde édition, Genève et Paris: J. J. Paschoud, 1814, 59p.; troisième édition, contenant de nouvelles réflexions sur la traite des nègres, Genève et Paris: J. J. Paschoud, et Londres: John Murray, 1814, 100p.

35) *Idem*, *Nouvelles réflexions sur la traite des nègres*, Genève et Paris: J. J. Paschoud, 1814, 46p.

36) *Idem*, *Des espérances et des besoins de l'Italie*, Paris, Strasbourg et Londres: Treuttel et Würtz, 1832, 24p. このパンフレットは、前注27に掲げた文献に原語のまま再録されることになった。その文献の[199]ページの注1によれば、当面のパ

よる教皇領内の一都市アンコーナへの小部隊派遣の背景と目的を明らかにするとともに、イタリアの希望と必要を代弁して、それらの充足に派遣部隊がいささかなりとも貢献しなければフランスの名誉と利益はかえって損なわれることになるというような主張を展開したものである。それは、新しい政治制度を樹立して間もない頃のフランス人のみならず、同時期のイタリア人、なかんずく1831年とその翌年との2度にわたるオーストリアの干渉に遭って壊滅的な打撃を被ったばかりのリソルジメント運動の闘士たちをも大いに勇気づける結果となったようである<sup>37)</sup>。当該パンフレットのイタリア語翻訳版が原典の発行と同じ年、すなわち1832年のうちに現われた<sup>38)</sup>のは、そのことと決して無関係ではないであろう。

第3に、シスモンディの時論的小品の中にはヨーロッパとその周辺の地域との間でのできごとをとり扱ったものも含まれている。たとえば、トルコにたいするギリシャ人の独立戦争についての著述家たちの解説を論評しながら1825年のミソロンギの戦役の重要性を浮き彫りにしようとした同年発表の論文「ギリ

---

ンフレットは、もともとはシスモンディ自身のつぎの歴史書の「序文」として公にされたものであるということである。J. C. L. Simonde de Sismondi, *Histoire de la renaissance de la liberté en Italie, de ses progrès, de sa décadence et de sa chute*, Paris: Treuttel et Würtz, 1832. だが、その歴史書の「序文」と問題のパンフレットとをつきあわせてみるなら、両者は内容的にまったく違ったものであるということがわかる。また、つぎの文献によるならば、このパンフレットは先と同じ歴史書の「付録」の部分の「抜刷」なのだということである。Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits...*, p. 64. しかし、その歴史書のどこを探してみても「付録」などはみあたらないのである。

37) Cf. Carlo Cordié, I corrispondenti del Sismondi, negli *Atti del colloquio internazionale sul Sismondi*, (Pescia, 8-10 settembre 1970), Roma, 1973, pp. 218-19; etc.

38) [Sismondi,] *Delle speranze e dei bisogni dell'Italia*, Lugano: G. Ruggia e Comp., 1832, 22p. この文献は、フィレンツェの国立中央図書館に所蔵されている。それを閲覧した際に、うかつにも著者名を正確に書き写すのを忘れてしまった。同じ文献は、ボローニャ大学図書館にも所蔵されているようである。この点については、当該文献を再録している前注27に掲げた文献の36ページを参照。

シャ人の現下の戦いとその歴史の研究者たちとにかんする考察」<sup>39)</sup>がそれである。この論文には、神聖同盟諸国の偽善的な和平工作によってではなしに紛れもなく非人間的な戦争の過程での諸民族のいわば棲み分けとナショナリズムの高揚との結果においてのみギリシャの民族国家としての独立が、ひいては「東方」における平和が実現されるのであるというような、いかにもギリシャ愛護主義者シスモンディにふさわしい見解が盛り込まれている。と同時に、「東方」を「野蛮」視する見解もそこには認められる。こうした「東方」観は、シスモンディに固有のものではなかった。それはむしろ、当時のヨーロッパの人々に共通する見方であったようである。この点は、1829年に発表されたシスモンディの論文「東方でのロシア人の戦いが文明に及ぼすと期待あるいは懸念されうる影響」<sup>40)</sup>によってもある程度うかがい知ることができるであろう。その新たな論文は、第1次バルカン戦争についての世論の動向を吟味しながら、おおむねつぎのような主張を表明しようとしたものである。すなわち、ヨーロッパ人の知性や徳性や自由の成果が「東方」にまで、いや世界中に普及するようになるためには、ヨーロッパ諸国の政治それ自体が、対外的にも「最大多数の最大幸福」という道徳原理にしたがって展開されるのでなければならない、と。

最後に、これまでに紹介してきたものばかりでなくシスモンディのほかの時論的小品にも立ち入ってみるならば、彼がいかにヨーロッパ人であったか、そしていかにヨーロッパの時事問題に強い関心を抱いていたか、また、いかにそれぞれの問題についての同時代の一般的ないしは支配的な見解に納得しがたい

39) J.-Ch.-L. de Sismondi, *Considérations sur la guerre actuelle des Grecs et sur ses historiens*, *Revue encyclopédique*, t. XXVI, juillet 1825, et tirage à part, Paris: Rignoux, [1825], 22p.

40) I.-C.-L. de Sismondi [*sic*], *Conséquences que l'on peut désirer ou craindre pour la civilisation de la guerre des Russes dans le Levant*, *Revue encyclopédique*, t. XLI, janvier 1829, et tirage à part, Paris: Plassan et C<sup>ie</sup>, 1829, 26p. この論文は、そのイタリア語翻訳版とともに、前注27に掲げた文献に再録されている。その文献の〔35〕ページに「1829年に Lugano で」公にされたと記されているイタリア語翻訳版のほうについては、筆者未見である。

ものを感じていたか、さらに、いかに当面の問題をみずから歴史的かつ総体的に考察しようとしていたか、などといったことが一段とはっきりするに違いない。そうになったら、歴史、経済、政治、等々にかんするシスモンディの作品全体についてのわれわれの理解の仕方も、当然変わってくるであろう。そして、とりわけ政治関係の作品にみられる彼の「民主主義」批判論と、経済関係の作品にみられる彼の資本主義批判論と、時論的小品にみられる彼のヨーロッパ時評とを総合的・立体的にとらえ、これと批判的にとり組むことができるようになれば、現在われわれが直面している民族問題や南北問題や地球環境問題等を総体的に、しかも根本的に解決してゆくうえでのなんらかの手がかりが得られるかもしれないと思われるのである。

#### (viii) 小 括

以上においては、シスモンディが公にした彼自身の作品をあえて幾つかのグループに分類しようと試みてきた。そうしたのはあくまでも、彼がいかに多様な側面を有する著述家であったかということを示したかったからである。しかしながら、彼はたとえば、生涯のある時期にはもっぱら歴史家としてヨーロッパの中世ないしは近世の歴史のみに視野を限定しながら著述し、別のある時期にはもっぱら経済学者として同じヨーロッパの近代の諸社会の経済的構造のみに視野を限定しながら著述する、などといったことはしていなかった。すでに明らかのように、彼はその生涯をつうじてつねに、ヨーロッパのいわゆる「二重革命」とそれに伴う混乱ないしは混迷の中に身を置いて、当時すでに瓦解していた、ないしはまさに廃棄されようとしていた旧い形態の諸社会と、まさに形成ないしは確立されようとしていた新しい形態の諸社会との双方を見据えながら、歴史家・経済学者・文学者・宗教学者・法律学者・政治学者・時論家等々の側面を有する一個の人格の全体として著述したのであった。その成果である彼の作品は、したがって、どの1点をとってみても、ヨーロッパ各地の様々な分野の人たちに多かれ少なかれ関係があるのではなからうかと思われるよう

な内容のものとなった。実際また、それらの作品は、少なくとも主要なものについてはイタリア語やスペイン語やドイツ語や英語などによる翻訳版がだされたということもあって、同時代のヨーロッパ諸国の幅広い分野の人々によって読まれもした。そしてその結果として彼らとシスモンディとの間に新たな交流が生まれ、その交流をつうじて彼の視野がいっそう拡大されることになった。つまり、シスモンディの視野と交際範囲の拡大は、彼の著作活動の、あるいは後世のわれわれからみるならば彼の「遺産」を形成する活動の、結果であったわけなのである。ところがその彼の交際範囲と視野の拡大は、同時に彼の「遺産」の形成の前提的契機でもあったのであって、この点はつぎに、彼のもう1つ別の種類の「遺産」をとりあげて紹介してゆくならば、さらに一段とはっきりするであろう。

## V. シスモンディが受けとって後世に伝えた文書類

すでに述べたように、シスモンディは、いわゆる「二重革命」とそれに伴う混乱ないしは混迷の時代にジュネーヴを起点とし終点としながら何度となくヨーロッパのさまざまな地域を訪れた。その間にはまた、ジュネーヴを拠点としてさまざまな活動に携わりもした。そしてそれらの活動の成果の一部分を、ヨーロッパのあちこちの発行所から公にしもした。そうすることをつうじて彼は、同じ時代のヨーロッパの各地に、しかも幅広い分野に、いよいよ多くの知己を得ていったのであり、彼らとの交流を深める中でみずからの視野をいっそう拡大させていったのである。と同時に、まさにその過程においてつぎつぎと新たな作品が生みだされ、シスモンディの「遺産」をますます豊かなものにする結果となったのでもある。実際、彼がのこした「遺産」の中にはこれまでに紹介してきた種類のものばかりでなく、さらにつぎのようなものも含まれているのである。

まず第1に、ヨーロッパ各地の、いや正鵠を期するなら欧米各地のさまざまな分野の人たちからのシスモンディ宛の手紙（葉書を含む）がある。シスモンデ

ィは、その生涯の間に全部で何名の人たちから何通の手紙を受けとったのであろうか。また、そのうちのどれだけが「遺産」として後世に伝えられたのであろうか。これらの点については詳しいことはわからない。イタリアの一研究者によれば、1970年代はじめの時点においては、150名前後の人々からのシスモンディ宛の手紙が「あちこちに散在している」。それらの手紙のリストは、ペッシャでの「シスモンディの獄中の友チェレスティーノ・キーティ (Celestino Chiti) によって1799年11月に書かれた」ものから始まる<sup>41)</sup>ということであった。だがそれは、すでに公表されていた手紙に限っての話であろう。というのも、ペッシャの町立図書館には、「1799年11月」より早い日付を有するキーティ以外の16名の人たちからのものが保管されているようだからである。この図書館の所蔵するシスモンディ・コレクションの目録の活字版<sup>42)</sup>によれば、そこに収められているシスモンディ宛の手紙は、「1793年7月27日」付のマーティンズ(H. Martyns)のもの<sup>43)</sup>から「1848年7月21日」付のラ・ロシュフーコー・リアンクール(La Rochefoucauld Liancourt)のもの<sup>44)</sup>までの約5,000通に及んでい

41) Cordié, I corrispondenti del Sismondi, pp. 220 e 222. なお、この論文の執筆者自身も注記しているように、「1799年11月」の日付をもった件の手紙は、すでにつきの文献において公表されていた。Giuseppe Calamari, L'amicizia di Celestino Chiti col Sismondi e i suoi riflessi sul Giusti, *Bullettino storico pistoiese*, LII, 1950, pp. 35-6, e l'estratto, Pistoia, 1950, pp. 7-8.

42) Aldo G. Ricci, L'archivio Sismondi, *Archivi e Cultura, rassegna dell'Associazione Naz. Archivistica Italiana*, XIII, gennaio-dicembre 1979, pp. 108-40.

この目録は、リッチによれば、ペッシャ町立図書館のパオーリ嬢 (Guglielmina Paoli) の協力を得て彼自身が作成したものである、ということである。(Cf. *ibid.*, p. 107)。それが活字の形式において公にされたことの意義は非常に大きい。というのも、当該図書館に備え付けられている目録は手書きによるものであり、しかも配列がきわめてアト・ランダムであるので、目を通すのにかなりの時間がかかるからである。

43) Cf. *ibid.*, p. 134.

44) Cf. *ibid.*, p. 118. ただし、この手紙の日付が「1848年」とされているのは、誤記かまたは誤植によるものと思われる。というのも受取人のシスモンディは1842年に、また差出人のラ・ロシュフーコー・リアンクールのほうはつぎの文献によれば「1827年」に、それぞれ没していたからである。『岩波西洋人名辞典』増補版、岩波書店、1981年、1622ページ。



る。それらの手紙の差出人の中には、たとえば歴史家のミュラー<sup>45)</sup>やギゾー (François Pierre Guillaume Guizot)<sup>46)</sup>、経済学者のデュポン・ドゥ・ヌムール (Pierre Samuel Du Pont de Nemours)<sup>47)</sup>やセイ (Jean Baptiste Say)<sup>48)</sup>やマルサス (Thomas Robert Malthus)<sup>49)</sup>、文学者のスタール夫人<sup>50)</sup>やフォスコロ (Ugo Foscolo)<sup>51)</sup>やマンゾーニ<sup>52)</sup>、宗教家のカミュ神父 (Le Camus)<sup>53)</sup>、法律学者にして政治学者のバンジャマン・コンスタン<sup>54)</sup>、政治家のマキントッシュ<sup>55)</sup>やルイ・ナポレオン<sup>56)</sup>やカッポーニ (Gino Capponi)<sup>57)</sup>、リソルジメント運動の指導者マッツィーニ (Giuseppe Mazzini)<sup>58)</sup>、ギリシャ独立運動の闘士ヴァズィロプーロ・ダールタ (D. P. Vasilopulo D'Arta)<sup>59)</sup>、軍人にして政治家ラファイエットゥ (La Fayette)<sup>60)</sup>、等々の名前がみいだされる。さらに、既婚か未婚かは別として多数の女性の名前が含まれていることにも驚きを禁じえない。ある研究者によれば、それらの女性が「好んで自分の心中をシスモンディにうち明けたのは、1つには彼の、酒れることのない同情のせいであり、また1つには彼が……女性にたいしてあたかも彼の姉かまたは妹であるかのような気持ちを抱かせるタイプでもあったからである。と同時に、政治や宗教や文学の諸問題に

45) Cf. Ricci, *ibid.*, p. 120.

46) Cf. *ibid.*, pp. 116 e 140.

47) Cf. *ibid.*, p. 114.

48) Cf. *ibid.*, p. 123.

49) Cf. *ibid.*, p. 119.

50) Cf. *ibid.*, pp. 125, 134, e 140.

51) Cf. *ibid.*, pp. 115 e 140.

52) Cf. *ibid.*, p. 140.

53) Cf. *ibid.*, pp. 118 e 134.

54) Cf. *ibid.*, p. 112.

55) Cf. *ibid.*, p. 118.

56) Cf. *ibid.*, pp. 110 e 140.

57) Cf. *ibid.*, pp. 111 e 140.

58) Cf. *ibid.*, pp. 119 e 140.

59) Cf. *ibid.*, p. 134.

60) Cf. *ibid.*, pp. 117 e 140.

ついでに要求度の高い手紙のやりとりによりまき込むことによって彼女たちの最良の資質を引き出す力も彼にはあったのである」<sup>61)</sup> ということである。けだし達見であろう。

シスモンディの「遺産」の中には前章までに紹介したもののほかに、第2に、彼自身の結婚や不動産の売買などの際に作成された文書類もみいだすことができる。上に述べたように、シスモンディとの間に手紙のやりとりがあった政治家の1人にイギリスの国会議員マキントッシュがいた。彼は、早くも1813年の時点において『南欧文学論』の著者シスモンディの「偉大な功績」<sup>62)</sup>を認めており、翌14年から彼との間に親交を結ぶようになったのであるが、その頃にはまだ、自分がやがてシスモンディの義理の兄になるなどということは夢にも思わなかったに違いない。ところが、1816年にマキントッシュの夫人の妹の1人ジェスィー・アレンがシスモンディにみそめられ、幾つかの障害を乗り越えて3年後には2人はついに結婚することになった。式は、1819年4月15日にイギリスのハンリーのスタッフォード伯爵領で挙行された。そしてその2日前に、イギリスの慣例にしたがって、まさに夫婦になろうとしていた2人とジェスィーの実兄の国会議員ジョン・アレン(John Hensleigh Allen of Cresselly)との間で結婚の条件を規定する署名入りの家族文書が認められたのである<sup>63)</sup>。しかしそれはあくまでも私的な文書にすぎなかったのであって、正式の夫婦財産契約書は、同年5月15日にジュネーヴの公証人ヴィニエ(Jacob Vignier)の事務所においてとり交された<sup>64)</sup>。その契約書は、シスモンディによるブル・ドゥ・フル街(ジュネーヴの市街地)の集合住宅の売却の際に作成された公正証

61) H. O. Pappe, The Significance of the 'Raccolta Sismondi' at Pescia for the Interpretation of Sismondi's Life and Work—Prolegomena to a New Biography, in *Atti del colloquio internazionale sul Sismondi...*, p. 165.

62) [James Mackintosh,] *De L'Allemagne, par* Mad. de Staël, *The Edinburgh Review*, vol. XXII, no. XLIII, October 1813, p. 218.

63) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, surtout pp. 375-80.

64) Cf. *ibid.*, p. 378.

書などとともに、現在ではジュネーヴの国立史料館に保存されているようである<sup>65)</sup>。ちなみに、シスモンディ夫人の一番上の姉はジョサイア・ウェジウッドゥ (Josiah Wedgwood of Maer) と結婚して彼との間に一女兒エマ (Emma) を儲けた。そのエマは、1839年にダーウィン (Charles Darwin) と結婚することになった<sup>66)</sup>。こうしてダーウィンとも縁続きとなったウェジウッドゥ家には、シスモンディの手紙も何点が保管されているらしいのである<sup>67)</sup>。

第3に、シスモンディの「遺産」の中には彼の両親や妹から彼自身が相続したのであらうと思われる書類も混在している。たとえば、彼の父親の、そしてまた母親の遺言状、父親と母親と妹のそれぞれが受けとった手紙<sup>68)</sup>、その3人のめいめいの筆になる手紙の下書きやメモや草稿、等々がそれである。わけても彼の母親と妹の日記は、シスモンディの思想を彼の人格の全体としてとらえようとする立場からは無視することのできない資料の1つであらう。そのような日記が実際にどれほどの分量において彼女たちからシスモンディへ、さらにシスモンディから後世の人々へと伝えられたのであらうか。この点についてもつまびらかではない。少なくともペッサ町立図書館所蔵のシスモンディ・コレクションの、例の活字化された目録によるならば、彼の母親の日記としては「1792年8月6日から1805年9月25日まで」<sup>69)</sup>のものと「1769年の日付を有するフランス語で書かれた1冊の日記帳と1794年から1821年までの日付を有する英語で書かれた49冊の日記帳」<sup>70)</sup>とが、また彼の妹の日記としては「1799年の

65) Cf. *idem, Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits...*, p. 58.

66) Cf. *idem, Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 379.

67) Cf. *ibid.*, p. 377 n. 2; *idem, Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits...*, p. 55.

68) それらの手紙の中でもとくにシスモンディによって書かれたものは、彼の筆になる他的手紙とともに、本稿では(上)のⅢ「シスモンディ自身によっては公にされなかった彼の作品」のほうに分類されている。

69) Ricci, *op. cit.*, p. 129.

70) *Ibid.*, p. 135.

2月6日から10月19日まで」<sup>71)</sup>のものと「1792年から1793年までの日付を有するフランス語で書かれた8冊の日記帳と1793年から1800年までの日付を有する英語で書かれた9冊の日記帳」<sup>72)</sup>とが、それぞれ同コレクションには収められているようである。だが、筆者はまだそのうちのごく一部分しか閲覧していない。筆者がのぞいてみたのは、「草稿7/経済学/エンリケッタ・シスモンディ：日記(1792年～1805年)その2」と表記された大型の書類ケースの中にシスモンディ自身の経済学関係の諸原稿とともに無造作に仕舞い込まれた彼の母親のフランス語交じりの英語による13冊の日記帳だけである<sup>73)</sup>。しかも急いでページを繰ったにすぎない。そのかぎりにおいて抱いた印象を述べるなら、彼女の日記帳はどのページをみても字間・行間をほとんどあけずに個性的というかク

71) *Ibid.*, p. 132.

72) *Ibid.*, p. 136.

73) シスモンディの母親のそれら13冊の日記帳には、1冊ごとに起筆と擱筆の日付や場所が書き込まれている。また、そのうちの10冊には冊数番号もつけられている。それは、原文に忠実に日本語で再現するならば、つぎのとおりである。すなわち、「1793年2月13日金曜日ロウニィ〔?〕に始まり1793年2月27日水曜日ロンドンに終わる3冊目の日記」53ページ、「1793年の5月29日サセックスのピーズマーシュに始まり7月に終わる14冊目の日記」36ページ、「1793年の7月30日サセックスのピーズマーシュに始まりケントのテンターデンに終わる15冊目の日記」74ページ、「1793年10月13日日曜日テンターデンに始まり1793年12月23日月曜日に終わる8冊目の日記」33ページ、「1793年12月ケントのテンターデンに始まり1794年2月19日に終わる17冊目の日記」45ページ、「1794年の4月8日火曜日ロンドンに始まり5月3日土曜日ブリュッセルおよびルーヴァンに終わる第10番目の日記」42ページ、「1794年の5月4日日曜日ルーヴァンに始まり6月4日木曜日シャトゥレーヌに終わる第11番目の日記」45ページ、「1794年6月5日火曜日～1794年8月〔?〕1日日曜日の日記」73ページ、「1794年10月11日日曜日シャトゥレーヌに始まり1795年2月27日金曜日シャタニユリア〔?〕に終わる第13番目」55ページ、「1795年の2月28日土曜日～3月15日日曜日のXIV」21ページ、「1795年の6月3日木曜日シャトゥレーヌに始まり7月29日水曜日シャトゥレーヌに終わる第15番目の日記」34ページ、「シェーナとジュネーヴでの日記：この小冊子は1802年11月11日シェーナに始まり1803年2月13日ジュネーヴに終わる」131ページ、「日記：1805年6月10日ヴァルキウーザに始まり9月25日ヴァルキウーザに終わる小冊子」57ページ、と。ただし、それぞれの日記帳のページ数は筆者が補筆したものである。

セのある筆記体でびっしりと書き込まれているので、ややもすると読む意欲が減退させられる。と同時に、そこにはシスモンディの足どりや生活ぶりに関連する興味深い叙述が散見されもする。したがって根気よく彼女とその娘との日記を繙読すれば、母親に先立たれるまでの、とりわけ亡命時代のシスモンディの生き様や考え方などにかんしてこれまでわからなかったことが明らかになるであろうし、またすでにわかっていることでもそれをいっそう詳しく知ることができるのではなかろうかと思われるのである。なお、ここに紹介した書類のほとんどについては、それらはシスモンディの視野や交際範囲の拡大の結果として生みだされたものであるとはいえないかもしれない。同じことはつぎにとりあげる書類にもあてはまるであろう。

最後に、シスモンディの「遺産」には彼の夫人や義弟や甥や姪夫婦らの、つまりは後に残された人たちの書類が紛れ込んだり付け加えられたりしてもいる<sup>74)</sup>。それらの書類の中には、たとえば1842年6月25日におけるシスモンディの死についての公知事実確認証明書<sup>75)</sup>などのほかに、彼の未亡人ジュシーのボッシ(Benigno Bossi)侯爵宛の委任状<sup>76)</sup>も含まれている。その委任状の名宛人であるボッシ侯爵という人物は、サリスによれば、イタリアからジュネーヴに亡命してシスモンディのいとこのニーナ・ベルトゥラン(Nina Bertrand)と結婚していた自由主義者であった。彼とその夫人は、少なくとも1832年までは、シスモンディの所有するブル・ドゥ・フル街の集合住宅の一室に住んでいた。当時は家主のシスモンディもまた、夫人のジュシーとともに同じ住宅の別の一室に居を構えていた。これらのことから、2組の夫婦はごく近い間柄であった。とくにシスモンディは、ボッシ侯爵に全幅の信頼を置いていたらしい<sup>76)</sup>。1839年1月1日付の彼の遺言状には、つぎのような一節がみられ

74) それらの書類の中でもとくにシスモンディからの手紙についていえば、本稿においてはそれを、前注68に記した彼の手紙と同じようにとり扱っている。

75) 当該文書は、ジュネーヴにある国立史料館に保管されているようである。この点についてはつぎの文献を参照。Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits* ..., p. 58.

76) Cf. *idem, Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, surtout pp. 386 et 388.

もする。すなわち、「私は尊敬すべき友ベニンニョ・ボッスイ侯爵に懇願する。この遺言の執行にあたる妻に、あるいはまた彼女が死んだあとにおいては姪に、力を貸してやったださるるように、と。私は彼女たちに続いて補助的に彼を遺言執行人と定め、その資格において、とはいっても妻の死後においてのみ、トゥルナンの別荘に置いてある私の蔵書を受けとってくれるよう彼にお願いするものである。……この遺言状は全文……私の手により3枚複写で筆記され、私により封印されたうえでボッスイ侯爵殿に手渡された。2枚目の写しは、私によりシェーナの私の机の中に仕舞い込まれた。そして3枚目の写しは、現在、妻のライティングデスクの中にある。……その3枚目の写しは、ベッシャ〔の姪のところ〕に送られることになっている」<sup>77)</sup>、と。シスモンディの死後に彼の未亡人ジェスィーがボッスイ侯爵宛に委任状を認めたゆえんであろう。ちなみに、シスモンディの眠るシェーナから彼女自身の母国であるイギリスにひきあげていったジェスィーの代理人として彼の遺言の執行に携わるようになったボッスイ侯爵は、上記の遺言状と1842年6月付の2通の遺言補足書<sup>78)</sup>にではなくしてあくまでもジェスィー本人の指示にしたがって、日記をはじめとするシスモンディの自筆の書類を焼却しさえしたといわれている<sup>79)</sup>。

## VI. 結 び

以上にみてきたように、シスモンディは、いわゆる「二重革命」とそれに伴う混乱ないしは混迷の時代のヨーロッパに生きた。彼は、ジュネーヴを起点とし終点としながら何度となくヨーロッパのさまざまな地域を訪れた。そうする中でみずからの交際範囲を広げ、視野を拡大させていった。そして、当時すで

77) J. C. L. de Sismondi, Testament du 1<sup>er</sup> janvier 1839, reproduit par Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits...*, pp. 38-9.

78) *Idem*, Codicille du 13 juin 1842; *idem*, Second codicille du 21 juin 1842, reproduits par Salis, *ibid.*, p. 39.

79) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 377 n. 2 et n. 3.

に瓦解していた、ないしはまさに廃棄されようとしていたヨーロッパの古い形態の諸社会と、まさに形成ないしは確立されようとしていた新しい形態の諸社会との双方を見据えながら、政治学者・経済学者・行政官・歴史家・文学者・宗教学者・法律学者・時論家・政治家等々、多様な側面を有する一個の人格の全体として思索し行動し著述したのである。と同時に、ほかでもなくその思索・行動・著述の過程において、あるいはその結果として、彼の交際範囲と視野がいよいよ拡大されてゆき、そのことがまた、やがて彼の「遺産」として後世に伝えられることになるものをますます豊富化させ、多様化させる結果となったのである。

シスモンディの「遺産」は、実際、膨大な数にのぼり、しかも多様性に富んでいた。それらの「遺産」は、シスモンディの生前には公にされなかった彼自身の作品と、彼自身によって公にされた作品と、彼が受けとって後世に伝えた文書類とに大別することができた。第1の作品群に分類されるものとしては、たとえば彼のメモや日記や手紙、内輪で楽しむための芸術的・文学的作品、自己研鑽用ないしは研究用の資料、出版物のための下書き原稿、講義用原稿、公文書、請願書等々があった。また第2の作品群に属する彼の多数の著書やパンフレットや論文などの内容は、歴史・経済学・文学・宗教学・法律学・政治学・時論等々、多岐にわたっていた。さらに第3の書類群として、たとえばシスモンディ宛の手紙や公正証書類、彼の両親や妹の書類などがあった。これには、彼のあとに残された夫人や親族の書類が紛れ込んだり付け加えられたりしてもいた。

本稿においてはそのようなシスモンディの「遺産」の主要なものをとりあげて、それらにまつわるエピソードを交じえつつ紹介してきた。そうする中で筆者が示そうとしたのは、概略つぎのようなことであつた。すなわち、シスモンディはいかに18世紀末～19世紀前半のヨーロッパの人であつたか、その頃のヨーロッパに生起したできごとによって彼はいかに翻弄されたか、そのことがまた彼の交際範囲や視野の拡大にいかにつびついたか、彼はいかに人間を慈し

み、人間の社会とそこでのできごとと強い関心を示したか、それらのできごとや社会についての同時代の一般的・支配的な見解に彼はいかに納得しがたいものを感じたか、そしていかにみずから歴史的かつ総体的に社会を捉えようとしたか、その際にはいかに支配-被支配の関係を疎んじ、人間の自由と共生と幸福を願ったか、そのために彼の労作はいかに空間・時間を越えて多くの人々に訴える力をもつことになったか、などといったことをである。

今後はこれらのことをさらにいっそう明らかにするためにも、以下のような課題にとり組んでゆくつもりである。なによりもまず、シスモンディがのこした「遺産」の、わけでも第1の作品群と第3の書類群に分類されたその行方を追ひ、こんにちにおいてはどこにどのようなものがどれだけ保管されているのかをつきとめてゆかねばならないであろう。すでに述べたように、彼がのこした「遺産」はそっくりそのままの姿でいまに伝えられているというわけではない。それは、人から人へと世代を越えて受け継がれる間に幾度か変容を蒙ってきた。たとえば彼の日記や手紙、それに彼宛の手紙の中には焼却されたり紛失してしまったりしたものがある。また、その一方で、彼の未亡人や親族の書類がシスモンディ本人の「遺産」に紛れ込んだり付け加えられたりもしてきた。このような構成上の変容を蒙りながら彼の「遺産」はこんにちに及んでいるのである。その全過程を追跡するとともに、現時点における彼の「遺産」の目録を作成しようというわけなのである。

そのうえで、シスモンディの生涯と彼の「遺産」とについての研究のあとを辿ってゆくつもりである。彼の生涯と「遺産」とにかんする研究は、こんにちに至るまで地道に続けられてきた。その結果、いまでは世界的にみると決して小さいとはいえない規模に達している。それらの研究の目的や主たる対象や方法や様式や成果などは、研究者の立場とあいまって実に様々なようである。そこで、これまでの研究史を整理し、その到達点ないしは限界を見定めるとともに、そこから筆者自身による研究の手がかりを得ることにしたいと思うのである。



と同時に、従来の研究を吟味するためにも一刻も早くシスモンディの「遺産」の現物に詳しく立ち入ってゆきたいと考えている。現時点における筆者の印象では、シスモンディはこれまで、過去への回帰を志向する牧歌的なロマン主義者とみなされがちであったが、しかし実は、同時代の公認の、あるいは支配的な見解に疑問を感じて18世紀末～19世紀前半というヨーロッパ史の、いや人類史の一大転換期における人間の境遇をみずから直視しながら、彼らの社会の伝統と「進歩」との調整に、ないしは両者間の矛盾の解決に心を砕いたというところにこそシスモンディの面目躍如たるものがあつたのではなからうかと思われる。とはいえ、筆者のシスモンディ研究はまだ緒に就いたばかりなのであって、従来の一般的なシスモンディ観についても彼の真骨頂についても確たることを述べる資格は現在の筆者にはない。そのような資格を得るためには何よりもまず、当時のヨーロッパの歴史的社会的状況を回顧しながら彼の「遺産」の現物に詳しく立ち入らなければならない。そうして、彼についての歴史的諸証言にも耳を傾けつつ、いわゆる「二重革命」とそれに伴う混乱ないしは混迷の時代のヨーロッパに生きたシスモンディの人格の全体に光をあて、彼の思想を総合的立体的に捉えてゆきたいと考えている。そのうえでさらに、彼の思想と対決し、そこから、現代の資本主義世界の表面に現われでている諸問題の根本的かつ総体的な解決のための指針や示唆などをつかみとることができればと思うものである。

(完)